

「六義園研修」報告

第一支部運営委員会

2020年1月20日（月）と27日（月）の2回にわたり、「六義園研修」が実施されました。1月20日は会員26名、非会員1名、委員2名の合計29名が参加し、1月27日は会員28名、非会員1名、委員2名の合計31名の参加と大盛況となりました。参加者は愛知県、山梨県、茨城県、群馬県、静岡県等の遠方からもご参加頂きました。



研修では、最初に六義園サービスセンター長の照井進介所長から座学で、国の特別名勝に指定されている六義園の歴史と見どころを講義頂きました。六義園は5代将軍綱吉の側用人（現在の官房長官に相当）の柳澤吉保が約7年の歳月をかけ、1702年に完成させた回遊式築山泉水の大名庭園です。万葉集や古今和歌集などで和歌に詠まれた紀州和歌の浦（和歌山県）の八十八箇所の名勝の景色をちりばめた庭園です。六義園は庭園の中から現代的建築がほとんど見えず、18世紀以来の庭園の良さを現代まで保っています。

春には有名なしだれ桜を求めて多くの方が訪れる為に、普段はしまっている駒込駅側の染井門が開き、ツツジの咲くG/Wや紅葉の秋にも染井門は開くとのことです。

明治以降、三菱の創始者岩崎彌太郎がこの地周辺を買い取りましたが、1938年に東京市へ寄付されました。従って、庭園内には江戸時代からの「吹上の松」の他に、明治時代に植えられたトウカエデやタイサンボク等が混在しています。因みに、有名なしだれ桜の樹齢は約70年とのことです。

座学の後は実地に庭園内を照井所長のご案内で1時間半廻り、通訳案内士が説明すべきポイントを多く教えて頂きました。六義園には雪吊りの松が多く見られますが、雪吊りには枝に荒縄を直接結ぶ「兼六園式」、松の下方に割り竹を八の字に曲げて、そこにイグサの内藤縄を結ぶ「北部式」、そして割り竹の代わりに棕櫚縄を使う「南部式」の三種類がすべて見られます。又、明治に造られた、小高い丘にある「つつじ茶屋」の柱は今では手に入らない貴重な太いツツジの幹が使われており、その周りは秋にはもみじの紅葉が見事とのことです。

2枚の大岩でつながれた渡月橋からの眺めは素晴らしく、外国のお客様はそこでプロポーズをしたいとの希望が多く寄せられているとのことでした。照井所長のお話では、当時の大名庭園は現在のアミューズメントパーク的な魅力が満載の所であったとのことで、その説明に共感すると共に、その魅力を再認識できた研修となりました。

